

多文化主義の旗の下に

日本学術振興会海外特別研究員
Research Institute of Sport and Exercise Sciences
Liverpool John Moores University
相澤 清香

被服衛生学部会報の「海外レポート」の執筆を依頼され、快諾をしたものの、暫し腕組みをしながら「さて何を書こう」と考え込んでしまった。実際同じような状況に置かれた者全て同じ悩みを抱えるのであろうが、私の場合、どうやら時期が悪かったようだ。「海外レポート」として諸外国の研究者との夢のような交流記を書ければよいのであろうが、長期在外研究もカナダに次いで2度目、イギリスでの生活も1年半に及んでくると、どうも肯定的ばかりに物事を捉えることが難しくなってくる。やたらとイギリスの『粗が見えてくる』という状況だ。ただイギリスの研究事情を淡々とお伝えするの何かにお役に立つかもしれないと考え直すことにした。社会情勢を知っていただくために少し研究から遠ざかった話題にも触れるが、我々のような外国人研究者が置かれた立場を正しく理解していただくためにお許しいただきたい。

先月行われた総選挙においてブレア首相率いる労働党は辛くも勝利したが、大幅に議席数を減らすことになったことは日本でも大きく報じられたのではないだろうか。この選挙において隠れた争点になったのは移民問題で、そもそも野党の党首が思わず口を滑らしたことが発端となり、当初はその発言が人道的見地から問題視されたものの、国民の予想外の支持を受けて、選挙戦後半では野党の党首が挙げてブレア政権の寛容すぎると考える移民政策を非難するようになった。国際多文化主義と人道主義を基本概念に掲げるイギリスのこと、移民排斥を謳うような急進論は表立って聞かれなかったものの、野党の大躍進は結果として移民の急増を快く思わないイギリス国民の真意をそのまま反映することとなった。

この問題の背景は実に根深い。戦後の経済拡大に伴い、50年代より旧イギリス連邦各国から底辺労働力として移民を受け入れたものの、70年代に入り経済の低迷と高失業率とを背景として移民の流入を制限するようになった。しかし既に移民が定住化の動きを見せており、一族郎党を次々にイギリスに呼び寄せるため、イギリスは恒常的な移民の増加を避けられない状態に陥ることになってしまった。これに加え、近年では外国為替市場における異常なポンド高を背景に、アフリカや中東諸国、中国から大量の経済移民が押し寄せている。この殆どが不法入国であり、イギリス政府が把握しているだけでも毎年数万人単位で増え続けている。更に昨年の東欧諸国のEU加盟に伴い、イギリス政府の予想を遥かに超える出稼ぎ労働者が押し寄せることになった。こちらは合法的な滞在であるため、入国管理局も完全にお手上げ状態である。

さて、増え続ける移民に対して業を煮やしたイギリス政府が何をしたか。もっとも手っ取り早い方

法であるが、ビザの延長費用をこの4月から引き上げた。入国管理局本部に直接書類を郵送した場合でも7万円、国内に4箇所ある支部に直接赴いた場合は10万円もの申請費用を請求される。航空運賃よりも高い申請費用を提示することで、暗黙のうちに母国に帰国するよう促しているわけだ。金額の問題だけであれば我慢もできるが、問題は大学又は研究機関で研究を予定している外国人研究者に対して、1年以上のビザが発給されなくなってしまったということである。アカデミックビジタービザの延長は一切認められておらず、延長申請をおこなっても却下されてしまうのである。滞在2年目以降は大学又は企業の研究機関と雇用関係を結び、就労ビザに切り替えない限り、イギリスにおける外国人研究者の長期在外研究は事実上不可能となってしまった。

では、在留資格を得るために雇用関係を結ぶとどうなるか。日本の学術支援機関より研究費を得ている場合、全額を一旦大学の口座に入金し、そこから月々配当を得ることになる。この際高額の在籍料を請求されることになるが、この額はどこにも公示されておらず、全ては受け入れ先研究機関の良心に全面的に依存することになる。不当に高額な在籍料として急遽請求されても文句は言えないわけだ。これがどんな深刻な問題を引き起こすかについては、年間12000ポンド(約240万円)の給与の謳い文句に惹かれてポストドクターとして渡英した私の知人が、雇用関係を結んだ途端に10000ポンド(200万円)の在籍料を請求されて、「これは詐欺だ!」と叫んだことでもお分かりいただけるだろう。在籍料は金額が指定されていないばかりか、不可解なことに『交渉も可能』なのだそう。重要なことは在籍料が授業料を目安に設定される場合が多く、EU諸国以外の外国人学生の授業料がイギリス人学生の実に4倍であり、医学部、法学部、経済学部の大学院課程については年間12000ポンドにも達するということである。EU諸国以外の研究者が法外に多額の在籍料を課せられる危険性が高いことは念頭に入れておく必要があるだろう。このためイギリスにおいて長期在外研究を行っている外国人研究者は殆どがEU諸国出身であり、キャンパス内で闊歩するアジア、アフリカ、中東諸国出身者は、実は殆どが学生である。結局『外国人研究者は要らない』というスタンスが見え隠れしているわけで、体の良い外国人締め出し政策が網の目のように張り巡らされていることに驚かされる。

かつて世界の海を制覇し、『陽の沈まない国』として繁栄を極めた大英帝国ではあるが、私の目に映るのは息も絶え絶えの斜陽の国そのものである。増え続ける移民問題や深刻化する国際テロを背景に、イギリスにおける外国人研究者の受け入れや諸外国との学術交流は今後益々難しくなることが予測され、この国は一体どうなってしまうのだろうと外国人ながら心配になってしまう。退行と衰退への道をひたすら歩みたいのだろうか。ただイギリスには大変申し訳ないが、現状を鑑みた時、決して日本人研究者に対してお勧めできる研究環境ではない。幾つか選択肢があるならば、イギリス行きは回避するのが賢明であろう。

『ふるさととは遠きにありて思うもの』(室生犀星)

異国にあって、郷愁を込めて祖国を振り返る時、日本がイギリスの現状から何かを学び、同じような過ちを犯して欲しくないと強く願って止まない。

『築き上げることは、多年の長く骨の折れる仕事である。破壊することは、たった一日の思慮なき行為で足る。』(ウィンストン・チャーチル)

第11回国際環境人間工学会（ICEE2005）に出席して

栞原 裕（九州大学大学院芸術工学研究院）

2005年5月22日～26日の5日間、スウェーデン南端の保養地 Ystad において、第11回国際環境人間工学会が、Lund 大学 Holmer 教授の世話で開催された。国際環境人間工学会は、1982年イギリス・ロンドンで第1回目が開催され、その後ヨーロッパ、北アメリカなどで、隔年で開催されている。以下の開催地は以下の通りである。

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------|
| 第2回（カナダ）： Whistler Mountain, 1986 | 第7回（イスラエル）： Jerusalem, 1996 |
| 第3回（フィンランド）： Helsinki, 1988 | 第8回（アメリカ）： San Diego, 1998 |
| 第4回（アメリカ）： Austin, 1990 | 第9回（ドイツ）： Dortmund, 2000 |
| 第5回（オランダ）： Maastricht, 1992 | 第10回（日本）： 福岡, 2002 |
| 第6回（カナダ）： Montebello, 1994 | |

本国際会議は、第1回の会議より、その基本方針として、会の運営を行なう組織委員会は、大学の講座や研究所単位で行なうことが慣わしとなっている。国際環境人間工学会プログラム委員会は、国際会議開催地や国際組織委員の選定それに投稿論文の査読を除き、各々の会議の運営に関しては全く支援を行っていない。そのため、今回は、Lund 大学の Holmer 教授の研究室が担当したが、教授を含めわずか4名で会の運営に当たっていた。第10回の福岡大会では九州芸術工科大学と福岡女子大学の教官10名で運営を行ない、大会当日にはさらに20名程度の大学院生の協力を仰いだことからすると、大変驚異的であった。

本国際学会には、九州大学から教員やポスドクだけではなく、多数の大学院生（10名）が発表を行なうことが出来た。これは、21世紀COEプログラム「感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点」が採択されたために、大学院生に海外交流資金の補助がなされたためである。多くの学生の発表自体は、満足できるものであったが、質疑応答では、日本人学生は、英語の質問が全く聞き取れず四苦八苦していた。25年前に私が最初に国際会議で発表したときも全く同様であったが、現在でもなお、日本における英語教育（特にヒアリング）には問題が多いことが再認識された。発表した学生は優秀な学生である、それでもなお聞き取りが出来ない。研究の国際化が強調される今、英語教育の根本的な変革が望まれる。

第11回国際環境人間工学会で行なわれた13セッションは以下の通りである。

- 1: Thermoregulation, 2: Exercise, 3: Protective equipment, 4: Clothing, 5: Firefighting, 6: Indoor environments, 7: Heat stress, 8: Modeling, 9: Water exposure, 10: Cold stress, 11: Methodology, 12: General physiology, 13: Ergonomics and user-oriented design

自学自動（自発的に自分の持ち味を発揮できるように）

神戸女子大学大学院家政学専攻生活造形学専攻 博士前期課程

環境生理学研究室 栞田道子

全国で唯一の単独校である夜間定時制高校で家庭科の授業を持っている。一昔前の定時制高校では経済的理由で昼間働き、夜高校に通うという生徒が多かった。しかし、現在の定時制高校に通う生徒の大半は中学の時、何らかの理由で不登校になった生徒、朝が苦手な生徒、昼間仕事を持たないで夜学校に来る生徒、高校中退後やはり高校卒業をしたい生徒、勉強はできるが人間関係でとか、多種多様である。

制服がないので自由におしゃれしてくる生徒や年中革ジャンを着ている生徒、冬なのに胸の大きく開いた服を着てきて「先生寒いわ」という。今の季節暑ければ冷房をつけても良い事になっているが、職員室では28℃設定でとにかく暑い。教室に行くとひんやり寒い、設定温度を見るとなんと19℃である。25℃くらいに設定温度をあげると生徒たちは暑いという。こういう状態の中で「衣服をみんなはどうして着るの？」と授業を始める。今自分が着ているものはどんなもの？どのような素材か書きだして？最初はめんどくさそうにしていた生徒もだんだんと「先生、綿100%となっているわ。夏は綿よね。」とか得意げにいう。なぜ夏は綿なの？「しらんわ。冬は毛で夏は綿に決まっている。」と言う具合である。人は入浴時以外ほとんどの時間を衣服とともに過ごし行動をともにしている。暑いときに冷房の効いた部屋にいれば快適かもしれないがヤドカリのように部屋ごと移動するわけにはいかない。衣服には体温を一定に保つ働きを助ける役割がある。衣服の持つ快適性とはねと、授業を進めていくうちに生徒たちが真剣に聞いているのが分かる。こういう授業ができるのも大学院進学をきっかけをつかって下さった日本女子大学の多屋淑子教授、平成15年4月入学時早々1年間休学してしまい16年4月復学した時に温かく迎えて下さった温熱生理反応の研究の指導教授平田耕造先生、助手の吉田先生を始め諸先輩方のお陰だと感謝致します。

授業で生徒と接しているときに、私は常に生徒一人一人を加点法で接するようにこころがけている。良いところを見つけ言葉に出し褒め認めてあげる。時間はかかるがそのうちに信頼関係が生まれ生徒は良い面を発揮してくるようになる。なにか大きな目標、夢を持ちなさいとも機会あるごとに話している。ただ自分で学ぶだけでなく、それをもとに周りの社会に働きかけていく姿勢、自分の持ち味をしっかりと育てるという考えの背景に、その持ち味が世の中の為になる方向に力を出すであろうと考える。私自身、大学院で衣服の快適性の研究を続け常に自分にはどのような資質があるのか自分の可能性を育て、自分にできる事を社会に貢献していきたい。